

自立への触媒

—「心のケア」とは異なるもの—



【子どもたちが求めているもの】万石浦の子ども支援を続けていて、ずいぶんと考えさせられることが多くなってきました。それは、子どもたちがあまりにも急激な成長と変化を見せる中で、その原動力になっているものがいったい何なのか、謎だからです。どうもその原動力となるものを導き出したのは、私たちの支援がきっかけであるように思うのですが、毎回毎回手探り状態での支援活動ですので、子どもたちのこのところの成長をよろこぶだけで、ほとんど分析らしい分析はしてきませんでした。

今回の支援で私たちが驚いたのは、まずその歓迎ぶりでした。土曜の早朝出発組が組めなかったので、今回は陸前高田からの南下組が万石浦の教室を開ける役目でした。1時に開室、2時スタートの予定でしたが、到着が2時ちょっと過ぎになってしまいました。「遅れた!」、と思って万石浦中学校の校門に入り、避難所の入口まで来ると、子どもたちが固まって私たちを待っていました。そして、口々に「おそい、遅い!」と叫びながら車を取りまいたのです。怒ってはいるのですが、その顔はみんなうれしそうな笑顔です。車に飛びつかんばかりにするので、思わず急ブレーキ。中には車をたたいてきます。あとで家の人に出会ったので様子を聞くと、もう7時半から行こうとしていたのをなだめてやっと8時半まで待たせたとのこと。ほとんどの子どもが午前中から待っていたそうです。今週神奈川から避難所の運営に来ている職員の方は、「待っている間は落ち着かないのもう大変だった。でも、みなさんが来たら落ち着いて遊び始めるのでびっくりしました。」と話してくれました。

以前何度か顔を出したことがある男の子が、少し遅れて今回も顔を出してくれました。前回は参加したのですが、しばらく顔を出していなかったのが、修学旅行のメンバーには入っていませんでした。私たちが気にして、「今日来たら、声をかけよう」と思っていました。遠慮がちにやってきたその男の子は、お母さんを連れてきていました。修学旅行のことでお母さんを連れてきたのだらうと思い、すぐに帰ろうとする母親を呼び止めて、旅行に誘いました。しかし話がうまくかみ合いません。どうやら本人は、何の話もしないで「学校まで送って欲しい」といって、無理に母親を引っ張り出してきたようです。近くにいた同級生の子が、「なんだ、自分で親を説得するって言ってたじゃないか」と事の真相を暴露して、すべてが理解できました。自分では言い出せず、親を何とかひっぱってきて、あとはこちらの大人達に期待をかけたのでした。「行きたいの?」と聞くと、お母さんの顔を横目で見ながら、小さくうなずいていました。

土曜日には顔を出した6年の女の子が、日曜に姿を見せませんでした。来週はいよいよ修学旅行への出発です。来ないはずはないのに、と思いつつ気になっていましたが、教室は終了の時間です。最後に全体で学活をして、土日の支援が終了しました。教室の



片づけの前に、その女の子の家まで、学活の時にみんなに配った旅行のしお리를持って行くと、お父さんの声で返事があり、本人が出てきました。お母さんも出てきましたが、本人は私たちにになにか素っ気ないそぶり。その態度が気になりつつも、教室に戻って片づけをして、避難所をあとにしました。車に乗ってしばらくすると、猛烈な勢いで避難所に向けて自転車を走らせるその女の子とすれ違いました。手を振りながら事の次第が飲み込めませんでした。きっと、今日は避難所に行つてはいけないと、親に言われたのでしょう。行きたい気持ちを我慢して、親の手前、素っ気ないそぶりをするしかなかったことが気がかりだったのでしょか、または、しおりを届けてもらったお礼を言いたかったのでしょうか、理由をつくって家を出て、間に合うかも・・・と自転車を走らせてきたのに違いありません。

私たちの支援が、すべての親や地域から100%受け入れられているとは思っていません。避難所での生活の中で、いろいろな軋轢も地域の中ではあったことでしょう。避難所を出たあと、避難所に遊びに行くことを禁じている親もいるはずですが、また、避難所で同じ生活をした仲でも、「あの子とは遊んではいけない」と言われていることもあるでしょう。そうした親たちの「干渉」をはねのけ、子どもたちは自分の意志で教室にやってきていたのです。子どもたちそれぞれの作戦で、自分の意志を通そうとしているのです。

自転車を走らせるその女の子を見て、思い出しました。以前も同じように心配して迎えに行くと、玄関口に出たその子の後ろから、「今日は雨だから避難所に行っちゃいけないよ」と母親の声が聞こえたことを。「雨だとなぜダメなんだろう?」と、その時はただ単純に疑問に思っていました。そして、そのあと避難所の教室に来て遊び始めた彼女が、「避難所に忘れ物したから取りに来た」と言っていたあの言葉は、避難所に行くことを禁止した親に対する言い訳の言葉だったのです。

地震・津波・避難所生活。親も苦しく、子どもも苦しい。自分の意志とは関係なく周囲は変化し、自分はそれに引きずられる。そんな子どもたちが、今自分で選びとったのが、避難所での私たちの支援であり、修学旅行だったのです。子どもたちが呑みこまれているそれぞれの家庭や、家庭を取りまいてる状況に抵抗し、ちょっと自分を取り戻そうとする場所が、私たちの支援だったのです。それは、状況に負けない自立への意志です。その自立への意志が、子どもたちの急激な成長の源だったのです。

いまだ避難所生活を強いられている女の子は、ついに母親の承諾が得られずに今回の修学旅行には参加できません。私たちの説得も功を奏しませんでした。でも彼女はここところ毎回教室に来て、修学旅行に向けての活動に参加しています。「出発は6時だよね。どこでお見送りすればいいの?」。ちょっと我が儘に見えた彼女も、私たちの前で親に、自分の意志をかなわないまでも伝えたとき、大きく成長したのです。

帰りがけに送っていった小2の男の子が、「今度はボクが送ってあげる。」と一人前

の顔をして、走りながらいつまでも車のあとをついてくるのを見ながら、陸前高田ですたんどばいみーの子ども支援も、万石浦での Ed.ベンチャーの支援も、彼ら／彼女らの自立への触媒の働きをしていることを自覚しました。修学旅行を経て、次に私たちの支援が向かう先は、「自立の意志のもとに、体験を言葉にしていく」子どもたちのそばに寄り添っていくことに違いありません。

30日(土)、6時、自立を求める万石浦の子どもたちは、旅に出ます。

【子どもにとっての意味ある他者としての教師】

陸前高田では震災直後の混乱をスタートとして、ある程度の物資が整うようになり、仮設住宅ができて移動が始まり、閉鎖となる避難所が出てきました。そこに至るまでの4ヶ月。この過程の中では、とりあえずは横に「おいておく」こととなった子どもたちの3月11日の体験と、その後の今ここに至るまでの経験。それらは、これまで「おいておく」ことになっていたわけですが、少しずつ落ち着きを取り戻していく中で、「おいておいた」、あるいは、時には「触れずにおいた」、あるいは、もしかしたら「避けてきた」かもしれないそうした経験にどう向き合うか、教師たちには、新しい課題が突きつけられるようになっていくことが感じられます。

前回の支援の際には、小友中学校の加藤校長先生とおよそ2時間、今回の支援では、小友中学校の菅野副校長先生と1時間、今後の支援を探るお話は、この新しい課題に直面する教師たちの複雑な心境を垣間見る時間となりました。以前にも報告したように、小友中学校では下校後に町に買い物に出向いていた子どもたちが震災の被害にあい、何人かの子どもたちが亡くなっています。一学年十数名という小さな学校から、数名が亡くなることの大きさ。その子どもたちがいれば、小友中学校単独で野球チームを作ることができていたけれど今はできない、といったような現実。今年度、野球部の顧問をしている先生は、今年度から加配で来られた先生で、震災をこの場所で経験してはいないそうです。「新しい先生だから、少しは新しい気持ちで取り組めるのではないか」という配慮の結果だそうですが、一方で、「そうしたために、メンバーがいなくなってしまったことを子どもたちはなかなか口にできないでいる」ということに、どう配慮していけばいいのか、そういう課題があると言います。加えて、もし、かれらの経験が言葉になって出てきた時に、「教師たちは、それを受けとめきれぬのか」という不安にもかられるそうです。しかし、「それを受けとめることなく、先にはたぶん進めないし、進んではいけない気もする」というお話もありました。そうした一連のことに、どのように学校として取り組んでいくのかが、今後の子どもたちの生き方に大きな影響を及ぼすであろうそのことの責任の大きさも感じるというお話もありました。

お話をお聞きしながら、教師たちが、「親子」とは異なる、大人ー子ども関係を模索しつつあり、教師たちが子どもに「意味ある他者」として向き合おうとする姿として、私たち支援者には映りました。それは「心のケア」という言葉に回収されるはずもない関係です。

・・・先日、Ed.ベンチャーの事務所に、ある大手報道機関の記者から問い合わせがあったとのこと。事務局長が活動の内容について説明すると、「つまり、『心のケア』ということですね」という反応だったとのこと。事務局長は、それに違和感を感じ

じて、「それとは違う気がします…」と話したといます。そう言えば、前回の支援のあたりから、学校関係者からも「心のケア」という言葉を聞くようになりました。もちろん、その言葉は、学校関係者から、けっしてすんなりと出てくるものではなく、とりあえず「そう言われているから、そうしておく」というような文脈で使われています。そこには、事務局長が感じた違和感とも重なるような感じがあります。「心のケア」に収斂されない活動が、やがては意味を持ってくるのではないのでしょうか。

【次回の支援の予定】7月26日現在

■7月29日(金)～8月1日(日)の第18回支援

□陸前高田

金曜日午後：小友・広田中の支援物資運搬

土曜終日・日曜日午前：モビリア仮設住宅の子ども学習支援(すたんどばいみー)

□石巻万石浦

土曜日午前～月曜日午前：修学旅行(富士山・グリーンパ・富士サファリパーク)

【お願い】日本財団の助成金(第2期)の応募に落ちたため、万石浦避難所の子ども支援の修学旅行に関わる費用が不足する見通しになっております。ご支援いただけますと大変助かります。

【協力に感謝!!】

■今回の支援隊のメンバー(16人) 柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、金子尚弘、苅谷夏子、グイキムチャイ(会社員)、富樫武司(大和市農政課)、増山博文(大和市環境農政部)、奥田謙介、大西雅子(東京理科大学)、理科大G:今井美里・大林沙紀・甘利悠貴
すたんどばいみー:チャンソワンナリット・劉麗鳳・長畑シゲミ

■活動内容

- ①小友中学校 理科室の機器備品整備作業(土)、物資提供:理科備品搬入(購入)
- ②広田中学校 物資の提供:理科備品搬入(購入)
- ③万石浦中学校避難所 子ども支援(土・日)

■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む)7/16～7/21

下新原なつみ(大野原小学校)、妹尾渉(国立教育政策研究所)、有本真紀(立教大学)、山田哲也(一橋大学)、伊藤稔(東京理科大学)、
※万石浦修学旅行限定でお振込いただいたみなさまは次号に掲載させていただきます。

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援(エドベンチャーヒガシニホンダイシンスイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail:toiawase@edventure.jp

